

4月の雪

吹きつける雪の中を歩いて傷をなめながら、僕は
煙草をふかしながら笑っていた
身体全体を震わせて笑っていた彼奴を思い出す
女ひとり、誰も気に留めぬ風景に向かい
シャッターを切り、歩いていた彼奴
同じ都会に生きながら出会わず
苦渋に満ちた旅先で出会った不思議さに
すっかり煙った山にさえ微笑を投げたくなる
とことんまでの都会人が孤りになり
そういった同士が出会った時
不思議に空が広大に見える
僕は自分の強さと弱さを知った
これは殆ど力に違いない
降るがいい、4月の祝祭の雪

(1983.4.4)